

り組みが実施されております。また、平成28年には、刑の一部執行猶予制度が施行し、法務省主催の研修においても、保護観察、プログラム、回復という文言がチラシにちりばめられ、今までになく新しい考え方の普及や変化の実感を感じ取っておりました。最近では、IR推進法、ギャンブル等依存症対策基本法も成立し、このような大きな時代の流れの中で、少し先の未来のために、アディクション看護は何をすべきかと考え始め、戸惑う日々が続きました。そして、戸惑いを学術集会で教えていただき、私なりの答えを出したいと思うようになり、テーマを「アディクション看護の発展～伝統の継承と新たな挑戦～」と致しました。



(参加者聴講)

古来より伝統を継承してゆくために、バリエーションを一切認めない方法もあり、エビデンスに基づく看護方法は、時代が変わっても継承されるべきことです。しかし一方でエビデンスが明確ではない看護方法もあり、実はそのほうが重要で難しいことも経験しています。依存症者の回復に絶対に「断酒」が必要な方も多くいます。

しかし「底付き」の議論、「断酒・減酒・節酒」の議論のように、アディクション問題に関わる方法論も一律な方法論では看護が通用しない時代へと変化しています。そのような中で、アディクション看護が発展するためには、さらに新しい看護の方法論を追求し、そのために議論や研究を重ねていく必要があると信じています。

長い看護の歴史の中でもアディクション看護は

日が浅い分野です。しかし、アディクションに関連する法的整備や「アディクション」という言葉自体の認知度は低いものの、芸能人の薬物問題などの報道により、依存症への関心は高まっているとも考えられます。

本学術集会のテーマである「アディクション看護の発展～伝統の継承と新たな挑戦～」の核となる部分は、5つのシンポジウムでした。それぞれ2～4名の看護職を中心としたシンポジストをお迎えし、新しい取り組みのご報告と熱心な議論がなされておりました。

紙面の関係上、すべてをご紹介できないのがとても残念ですが、どのシンポジウム会場も熱気に溢れ、アディクション看護の新たな挑戦が始まっていること、そしてそれがアディクション看護のさらなる発展に大いに期待できることが実感できたシンポジウムや一般演題、交流集会でした。

ご多用の中、シンポジストの皆様にご心より感謝申し上げます。



(シンポジウム)

シンポジウム1：山谷の今、看護の役割を考える

シンポジウム2：子ども虐待とアディクション

シンポジウム3：当事者の語りから何を学ぶか

シンポジウム4：一般病院における依存症支援を考える

シンポジウム5：依存症専門病院の新たな看護の取り組み

本学術集会では、先駆的活動をされている先生方に基調講演・特別講演・教育講演等をお願い致しました。諸先生方には長いご経験や研究成果から得られた知見を丁寧なスライドやわかりやすいご講演を賜り心より感謝申し上げます。簡単ではありますが、先生方のご講演をご紹介しますいただきます。

(1) 基調講演：徳永 雅子先生

保健師時代より、アディクションに精通され、2002年に保健師としては先駆的である「徳永家族問題相談室」を開設されました。世田谷区時代の酒害相談からのかかわりやアメリカに視察に行き、回復の意味を実感されたお話は、とても興味深く聞かせていただきました。他機関との連携の重要性を改めて教えてくださいました。

(2) 特別講演Ⅰ：樋口 進先生

日本のアディクションの“顔”として、国内外に発信するリーダーとしてご活躍され、講演前日にジュネーブから帰国し当学会に駆けつけてくださいました。様々な基本法制定では国や各関連部署との調整など計り知れないご苦労もあったかと拝察いたします。今回のお話は、行動嗜癖を中心に、概念をわかりやすく、また丁寧にご講演いただき、参加者から概念が良く理解できたとの声が、事務局にも届きました。

(3) 特別講演Ⅱ：斉藤 環先生

「引きこもり」診療の世界的な第一人者であり、不登校・社会的ひきこもりなどに関する研究であまりにも著名ですが、今回のご講演は、「オープンダイアログとアディクション」をテーマにご講演をお願いいたしました。会場は熱気にあふれておりましたが、日本における黎明期にあるオープンダイアログとアディクションとのつながり、引きこもりの治療には依存症の治療モデルが応用されることもあり、広義のアディクションと考えられていると、興味深いご講演でした。

(4) 教育講演Ⅰ：吉岡 隆先生

豊富な臨床経験と多くの著書のある先生は、常に「回復とは何か」を先生自身が問い続け、「問題があることが問題ではなく、問題と向き合おうとしないことが問題だ」と独特の視点から、淡々と参加者一人一人に問いかけるよう、静寂な雰囲気の中、熱いご講演をいただきました。

(5) 教育講演Ⅱ：成瀬 暢也先生

長年の臨床経験から、依存症ご本人やご家族の様々な葛藤や低い自己肯定感に接し、誤解と偏見にさらされ、人権をも脅かされていることをお話くださいました。依存症治療の最新の動向や考え方の変化や支援者が依存症者と向き合う際に「陰性感情」や「忌避感情」から開放されるコツも教えていただきました。

(6) 教育講演Ⅲ：森田 展彰先生

アルコールや薬物の本人と家族支援、児童虐待やDV等、アディクションや関連する問題に関する研究を長年行っており、アディクション研究の第一線でご活躍し続けておられます。ご講演は、アディクション問題にお困りの家族支援に対する共通認識を広げてゆくことや柔軟な対応（アディクションの対象による違い）等についても詳細に教えてくださいました。

(7) セミナーⅠ：鶴身 孝介先生

長年、臨床の傍ら、アディクションに関わる脳画像研究をされていらっしゃる先生ですが、今回はギャンブル障害の方と一般の方の脳画像の比較などを通して、看護職にもわかりやすい脳画像や事例も用いてくださり、興味深いお話を聞くことができました。

(8) セミナーⅡ：水上 由紀先生

アディクトの栄養に着目し、アルコール過剰摂取と栄養代謝についてのご研究をされていらっしゃる先生のご講演でした。人が生きてゆくための当たり前の栄養について、看護職にわ

かりやすくご講演をいただき、明日からの看護に役立つお話を聞かせて頂きました。



(参加者聴講)

ワークショップ、絵本の読み聞かせ、交流集会にも多くの参加者がお越しいただきました。一般演題発表でも日頃の看護活動のご発表や新しい取り組みや研究成果の発表などありました。質疑応答が活発に行われ、アディクション看護のさらなる可能性が、理解することができ、大きな力を頂いた気が致しました。

本学術集会を開催するにあたり、本学看護学科の実行委員の先生には、実習期間中にも関わらず実行委員をお願い致しました。また他大学看護系大学の諸先生方、市区町村保健センターの保健師様、本来業務のご多用の中、ご協力を賜り有難うございました。

最後になりましたが、小雨に降る中、全国各地より、北千住の地に足をお運び頂きました皆様に心より感謝申し上げます。さらに日々の看護活動や研究を継続され、多様なアディクションに対する看護の発展を心よりご祈念申し上げます。



<<学術集会に参加して>>

秋田大学医学部保健学科 熊澤由美子

学術集会の会場となった帝京科学大学医療科学部に最も近い「北千住」駅に降り立った時、今では遠い日となった足立区竹ノ塚保健所での酒害相談の実習場面を思い出した。あの時抜け出したいほど落ち着かない本当の気持ちを隠して、実習指導者向けの感想を述べていた自分が、まだどこかに存在している気配をひとり感じていた。

アディクション看護の発展～伝統の継承と新たな挑戦をテーマに行われた学術集会で、今まで何を受け継ぎこれから何を伝え挑戦していくことができるのか、学術集会を彩る贅沢な講師陣や集まった仲間から貪欲に吸収できる2日間としたい思いで参加した。多くのプログラムの中で主に2つのシンポジウムからの気づきを述べたいと思う。

シンポジウムⅡは「子ども虐待とアディクション」と題した3つの行政機関からの話題提供だった。機能不全家族の中で育つ子ども向け集団心理プログラムの紹介では、子どもの気持ち・感情に焦点をあてて、子どもの理解に合わせながら視覚媒体を最大限工夫し肯定的な環境の中でお互い尊重しあえる関係を学べる心理教育が実践されていた。集団心理教育の実践は一地方からすれば羨ましい限りであるが、子どもに限らず個別相談等で活かせる絵本やカードはツールとして準備し活用できると考えられた。虐待対応に実際にあたる母子保健領域や児童・女性福祉部門には、切れ目のない支援が求められている。妊娠期から支援にあたる専門職員の配置がタイムリーな支援につながっている足立区の事例や、親の育児改善の前に社会的孤立解消に目を向けて継続的に取り組む横浜市の事例から、アディクション・アプローチの理念の理解と実践が根底に求められていると感じた。

シンポジウムⅢは「当事者の語りから何を学ぶか」で著名な先生方で構成された内容であったが簡単ではなかった。今までも当事者の声は聴いて

きたしこれからも聴くであろうことだが、その人の意味世界をどのように聴いて理解していくのか、何処かでわかった気でいたことに釘を刺された気持ちだった。そう、わかった気持ちでいる自分ではなく、学生時代グループの中で感じ置いてきぼりにしてきた違和感や不具合さといった自分の気持ちをもう一度拾い上げるつもりで。自ら正直な思いを語ることができそれを少数で対話し分かち合える世界を地域でつくることまたは自助グループ活動の支援につなげたいものと考えた。

本学術集会で特別講演や教育講演で先生方が触れられたハームリダクションやオープンダイアログ等、広く異なる文化や健康政策から生み出された理念や実践は、これからの我が国での新たな挑戦につながる可能性を秘めている。その豊富な材料を与えてくださった大会長の吉岡幸子先生はじめ大会運営のスタッフの皆様、講師陣の先生方に深謝いたします。

＜＜アディクション看護発展への所感＞＞

鳥取看護大学 安田美彌子

日本アディクション看護学会が第18回の学術集会を開催した。他の学会と日程が重なっていたので、理事会と集会の第2日目の一部にしか参加できなかったが、プログラムの充実（大会長講演、基調講演のほかに特別講演2つ、教育講演3つ、シンポジウムが5つ、交流集会在3つ、セミナーが2つ、ワークショップに絵本の朗読もあった）、参加者の多様性、内容の充実などあらゆる面で発展していることに改めて驚きを覚えた。

講師の先生方も多方面から参加して下さっており、時宜を得たテーマも満載であった。今回の企画力は大会長の吉岡幸子先生の力によるが多かったのであろう。残念なことに参加者が少なく、せっかく素晴らしいシンポジウムがあっても聞いている人が少なかった。これだけの内容なら、もっともっと多くの看護職に参加してもらいたいと改めて感じた。

何回続くか、これからどのように進めていったらよいのか暗中模索の中で、手弁当で細々と活動していた第1回のころを思うと隔世の感があった。

大会テーマを第1回から追ってみると「21世紀アディクション社会と看護」に始まり、アディクション社会と看護のテーマのもとに「アディクション看護とは」、「アディクション看護の専門性は」などが10年間問われている。その後は「機能不全家族とアディクション看護学」、「母性・家族・ジェンダーとアディクション看護学」、「当事者から学ぶアディクション看護」などテーマが少し絞られてきている。そしてここ数年間は「依存症と感情」、「アディクションを超えて」「生きづらさの語りと共存」そして今回の「アディクション看護の発展～伝統の継承と新たな挑戦～」と変わってきている。

学術集会以外の日本アディクション看護学会の活動も少ない予算の中で研修会の企画や、学会誌の発行、ニュースレターの発行、ホームページのアップなどが担当者の努力で行われている。感動したのは、研究助成金の制度ができ大学院生など若い看護職の励みになっていることや、学会誌の投稿原稿が、まだ数は少ないものの原著が増えてきており、論文の質も向上していると思われることである。

今後の取り組みとして、これまでアディクション看護の専門性を検討してきたのだから、学会認定のアディクション看護認定看護師を考えてほしい。そしてアディクション認定看護師がいれば保険診療費がアップするような制度になってほしいとも考えている。

＜＜企画委員会からのお知らせ＞＞

令和2年3月ごろに、令和元年度第二回研修会を予定しています。日時、会場等が決まり次第HPにUPいたしますので、ご覧ください。（大澤）

<http://plaza.umin.ac.jp/~jaddictn/>

＜＜第19回学術集会のお知らせ＞＞

開催日：令和2年12月19日(土)・20日(日)

開催場所：聖徳大学（千葉県松戸市）

松戸駅より徒歩10分

大会テーマ（予定）：

「アディクション看護における看護介入の方向性～児童虐待・ギャンブル依存症・薬物依存症などへの看護介入のあり方」

第19回学術集會長 聖徳大学 日下修一

日本アディクション看護学会第19回は令和2年12月19日(土)・20日(日)の2日間、千葉県松戸市の聖徳大学で開催予定です。松戸は『野菊の墓』の舞台であり、様々な歴史的施設が存在しています。聖徳大学から徒歩10分ほどの場所に戸定が丘歴史公園があり、公園内には水戸藩最後の藩主・徳川昭武が建てた戸定邸(国指定重要文化財)と庭園(国指定名勝)、戸定歴史館、お茶室の松雲亭があります。また、松戸には江戸川を挟んで矢切(千葉県松戸市)と柴又(東京都葛飾区)を結ぶ矢切の渡しがあります。柴又は寅さんと有名な柴又帝釈天がある地域であり、東京と隣接している松戸に是非訪れてください。交通の便は常磐線快速を使えば、上野から20分、東京駅から25分ほどの距離です。ちなみに18回学術集會が開催された北千住と松戸は快速電車で9分です。

本大会のテーマは「アディクション看護における看護介入の方向性～児童虐待・ギャンブル依存症・薬物依存症などへの看護介入のあり方」を予定しております。アディクションからの回復について、看護職に何ができるのかということを知りたいと思い、今回のテーマを挙げました。特に、現場の皆様の具体的な介入方法の実践報告を初め、ネット依存、スマホ依存など、新たな依存症看護の枠組みを構築していくためにも、アルコール依存症、薬物依存症、ギャンブル依存症、摂食障害など様々なアディクション問題への介入について、参加者同士で報告・検討したいと思います。また、千葉県では野田市で児童虐待の重大事

件が発生してしまいました。こうした事件を繰り返さないためにも、病院・地域での児童虐待への介入方法も模索したいと思っています。そうした点も踏まえて、今回の大会テーマを決めました。

具体的なプログラムとして、大会長講演、教育講演(1～2)、特別講演(1～2)、シンポジウム、演題発表(口演、示説)、交流集會(6～8)を予定しています。懇親会は12月19日夕刻、18:00～19:30を予定しております。詳細につきましては、今後、学会ホームページ等に公開してまいりますので、ご確認願います。

＜＜事務局からのお知らせ＞＞

事務局は、昨年10月に移転してから10ヵ月目となりました。今後、学会の情報が迅速に届くよう、会員メーリングリストの運用を考えております。また、今年度の会費の納入が確認できなかった会員様には、会費の振込用紙を同封しておりますので、なるべく早めのお手続きをお願いいたします。今後ともご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。 事務局長 丸山 昭子

＜＜ 編集後記 ＞＞

第18回学術集會は初めて6月に開催されました。次回、第19回学術集會は12月です。アディクション看護にかかわる臨床、教育の場にいる多くの皆様の交流の場、学びの場になっていることが参加者の感想、所感を通して伝わると思います。(荒木)

＜＜ 事務局住所 ＞＞

〒243-0124

神奈川県厚木市森の里若宮9の1
松蔭大学看護学部 丸山昭子研究室内
日本アディクション看護学会事務局

日本アディクション看護学会補助機関誌

発行：2019年9月30日

編集長：荒木とも子

発行者：丸山 昭子

日本アディクション看護学会事務局